

谷崎潤一郎「痴人の愛」における「宿命の女」像の検討

西村 菜々

一 はじめに

「宿命の女」はフランス語 *femme fatale* の定訳であり、男を惑わせ、最終的には破滅させる性質を持つ女性像のことを指す。そのような女性像は古くは西洋の神話や伝承に登場し、特に一九世紀のヨーロッパ世紀末芸術において、文学や絵画など幅広い領域でモチーフとされてきた。マリオ・プラーツは、

宿命の女は、神話の中にも文学の中にも、古来常に存在した。なぜなら、神話や文学は現実生活の諸相を想像の鏡に映したものであるが、現実生活には、程度の差こそあれ、傲慢で残酷な女の典型がいつの世にも見られるからである。(1)

と「宿命の女」の持つ普遍性について述べた。そして近代日本の文学においても、そのような女性が登場する小説が多く見られる。「宿命の女」の日本における受容については、平石典子氏が「翻訳を通して日本に紹介された」と説明している。平石氏は明治三四年に出版された上田敏訳の美文集『みをつくし』をその先駆けとし、そこに描かれた西洋の「宿命の女」が当時の若者に影響を与えたと述べている(2)。また、岩佐壮四郎氏は明治三九年に島村抱月によつて書かれた、イギリスの画家・ロセッティの「宿命の女」評に触れ、「この一文が書かれた前後から、我国の文学・美術の舞台のうえにも、しだいに明瞭な輪郭をもった、だが複雑な表情をその顔に湛えた一群の女性達が姿を現わしはじめるのである。」(3)と述べる。日本近代における「宿命の女」という女性像は、明治の近代化の中で西欧より「輸入」されたものとする見方がある。大久保喬樹氏は、明治以降の小説について、

めまぐるしいほど西欧文学の影響を次々に受けて変遷し、発展してきたが、その一方で、それほど派手に前面にはあらわれないが、明治以前の様々な伝統土着的文学特質も根深く、その底には流れつづけてきたのである。その両者が合わさって日本独自の近代小説というものが形成されたといえる。(4)

と述べているが、「宿命の女」が西欧より「輸入」されたモチーフであることを考えると、まさに「西欧文学の影響」と、「明治以前の様々な伝統土着的文学特質」の融合が、日本近代文学の「宿命の女」には現れているのではないだろうか。人物の特徴に見える日本的な要素、西洋的な要素に注目して女性像について検討することで、日本において「宿命の女」がどう形成されていったのかを明らかにすることができる。

本論文では、日本近代文学に現れる「宿命の女」の一例として、谷崎潤一郎「痴人の愛」に登場するナオミについての考察を行っていく。「痴人の愛」のナオミは数ある「宿命の女」の中でも、「西欧文学の影響」と「伝統土着的文学特質」が顕著に現れている女性像であることが、彼女を取り上げる理由である。

ナオミは一見西洋的・近代的な女性という印象を読み手

に与える存在となっているが、今一度彼女の人物造型とその特徴に注目して考えてみると、そこには、日本の前近代的悪女の特徴が浮かび上がってくるように思われる。また、西洋の「宿命の女」像、そしてそれ以外の西洋文学からの影響も彼女の人物像の根本に確かに存在すると考えられる。そして、文学に現れる女性像はその作家の芸術的理論や思想を反映したものであることが少なくない。「宿命の女」の人物造型の根底にも作家の思想や理念が流れていると考え、「日本」「西洋」の融合だけでなく、そちらの方面にも目を向けつつ、論を展開していく。

まず「痴人の愛」のあらずじを以下に示す。電気会社の技師、河合譲治はある夢を持っていた。それは少女を引き取り理想の女性へと育て、嫁に貰うというものである。たえず西洋への志向を抱く譲治は、西洋的な外見や名前を持つ、陰鬱で無口なカフェの女給、ナオミに目をつけ、彼女を引き取り、「何処へ出しても耻かしくない、近代的な、ハイカラ婦人」にするべく養育する。やがて二人は結婚する。ナオミの肉体は理想以上に美しく成長し、譲治は彼女への崇拜心を抱く一方、彼女の虚栄心や傲慢さ、うぬぼれといった性格上の欠点が鼻につくようになる。ある日、ナオミが何人もの男と怪しい関係になっていることを知った譲治は彼女を外出禁止にするが、そんな中でもナオミは慶応の学生、熊谷と密会し

ていた。そのことを知った讓治は激昂し、喧嘩の末ついにナオミを追い出す。一時は晴れやかな気分になった讓治であったが、喧嘩の際にナオミが見せた、憎らしく妖艶な形相の美しさが頭から離れず、彼女を追い出した軽率を悔いた。ナオミを探し出すことにした讓治であったが、彼女がいまだ男の家を泊まり歩いて暮らし、周りの男から娼婦のように扱われていることを知り、今度こそナオミを忘れようと決める。その後母を亡くし、孤独と失恋に苦しむ讓治のもとへ、突然ナオミが荷物を取りに帰ってくる。その後も何度か家に来るようになったナオミであったが、ある日突然、彼女は西洋の女優のように白い肌になって、更なる美しさをそなえるようになり、讓治はナオミに以前よりも強い崇拜感情を抱くようになってしまう。ナオミの強い美しさの魅力にとりつかれた讓治は、ナオミに降伏し、彼女に服従する道を辿っていく。以上が「痴人の愛」一連の流れである。その魅力のもとに讓治を服従させ、その生き様を一変させた「痴人の愛」のナオミは、まさに讓治にとつての「宿命の女」と言える。

二節では先行研究や作中におけるナオミのイメージを整理する。三節ではナオミに見出せる日本の「毒婦」的側面と、毒婦との相違点について指摘し考察する。四節では、ナオミと作中に登場する「カルメン」とを比較し、ナオミに見出せ

る西洋の影響について指摘する。五節ではこれまで行った毒婦物と「カルメン」との比較から見えた「痴人の愛」の特殊性について考察する。六節では結論として、「痴人の愛」そしてナオミに反映された、谷崎による「近代日本の否定」について指摘する。

二 作中・先行研究におけるナオミ

二・一 作中に見えるナオミのイメージ

「痴人の愛」は急速に近代化の進む大正の東京を舞台にした作品であり、作中には数多くの西洋的、また近代化を象徴する事物が物語の舞台装置として散りばめられている。谷崎自身、この作品について「私の小説において反映されたのは、この欧州大戦後の現代日本、とりわけアメリカの風俗習慣に染まった、日本社会のある部分であります。」⁽⁵⁾と述べており、この作品が「西洋」を大きな一つのキーワードとした上で作られていることは明らかである。まず、主人公の讓治からして西洋に強い憧れを持つ人物である。彼自身「自分は野暮な人間であるにも拘はらず、趣味としてハイカラを好み、万事につけて西洋流を真似する人間であると語っている通りである。『元来が田舎育ちの無骨者』で、『背が五尺二寸といふ小男で、色が黒くて、齒並びが悪』い彼は、そう

いった自分の欠点の対極にいる西洋や西洋人に憧れを抱き、陶酔する。そんな譲治が西洋的な要素を多く持った女性、ナオミに惹かれるのは当然のことと言える。ナオミの西洋性はその顔立ちや体つき、名前など外面の部分に特に現れている。

実際ナオミの顔たちは、(中略) 活動女優のメリー・ピクフォードに似たところがあつて、確かに西洋人じみてみました。此れは決して私のひいき眼ではありません。私の妻となつてゐる現在でも多くの人がさう云ふのですから、事実には違ひないのです。(一九八頁)

この「メリー・ピクフォード」⁽⁶⁾の名前は、彼女と似ている人物としてこの場面の他にも度々登場する。ナオミという名前は彼女の持つ西洋性を強調し、「奈緒美」は素敵だ、NAOMIと書くことまるで西洋人のやうだ、と、さう思つたのが始まりで、それから次第に彼女を注意し出したのです。」(同頁)と、譲治が彼女に惹かれる大きなきっかけとなっている。

譲治はそんなナオミに西洋の体現を要求し、ナオミ自身も西洋を志向するようになる。そのことが最も顕著に現れているのは、ナオミが西洋の女優の表情やしぐさを真似す

る場面である。それ以外にも、ナオミの水着姿が「マツクセンネットのベージング・ガール」を想起させると書かれていたり、「ケラーマン」「ピナ・メニケリ」「ジエラルディン・フアーラー」「グロリア・スワンソン」「ポーラ・ネグリ」「ビープ・ダニエル」など、実在した欧米の女優のしぐさや表情を真似するナオミが描写されている。

二・二 先行研究におけるナオミの評価

ナオミを取り上げた先行研究には大きく分けて三つの軸がある。まず一つに、ナオミは「西洋」の投影であるとする論である。先述したナオミの西洋性に立脚した論である。まず中村光夫氏が「痴人の愛」の西洋理解の浅薄さを指摘し⁽⁷⁾、前田久徳氏はその論を踏まえて「(西洋)の持っていた浅薄さをそのまま有する生身の女」とナオミを説明している⁽⁸⁾。松本鶴雄氏はナオミについて「明治以後の日本の国家や社会や多数の世間にとつての「西洋化」あるいは「近代化」の権化」⁽⁹⁾とし、そこには文明批評的なまなざしが伴っていると述べる。また千葉俊二氏は、ナオミ像形象化の背後には一九一〇～二〇年代のアメリカ映画における、男を破壊に追いやる妖艶な悪女を演じる「ヴァンプ女優」誕生があるとし、譲治の理想の女性像が「アメリカ映画の提供する女性美のイメージを規範」とするもの、ナオミはその体現者である

という見方を示している(10)。

二つ目に、彼女の持つ二面性を論じた研究が見られる。野口武彦氏は、最終的に譲治の手を離れて多くの男と関係を持つ「娼婦」的なナオミを、「だれからも所有されることによつてだれにも所属しない女」とし、その「だれにも所属しない」ことがナオミの「超越的なもの」としての彼岸性を發揮させているとする(11)。田中美代子氏はナオミを「肉欲と感官に訴えて男を凌駕し、足下に屈従せしめる超精神的な女」とし、「卑賤と聖性を体現」していると述べている(12)。内藤千珠子氏はナオミに「聖／悪」「女神／娼婦」の二面性があり、その「アンビバレントな両義性」が「物語の枠を豊かにふくらませる」と評価した(13)。

それとつながる論調として、三つ目には、谷崎文学に頻出する超越的な女性、「永遠の女性」像としてのナオミを論じる向きがある。谷崎の「永遠の女性」については、野口氏の『谷崎潤一郎論』第五章「女の存在論」に詳しい。橋本芳一郎氏はナオミを谷崎の他作品に登場する淫婦的、魔女的な女性と並べて谷崎の「共通の永遠女性像」として取り扱い、「これらはみな作者の女性観の反映」と述べた(14)。こうした研究には谷崎の白人女性崇拜を母性思慕の主題に結び付け、ナオミは「母の代用品」であったとする細江光氏(15)や、プラトンのイデア論との関わりからナオミに触れた西

莊保氏(16)などの論がある。

先行研究におおよそ共通する傾向としては、ナオミは谷崎自身の西洋崇拜や女性観などが強く反映された女性像という見方がある。その人物造型を考える上で、谷崎の思想や理念についての問題が伴うのはもはや不可欠であるというような印象を受ける。しかしそれならば、ナオミの人物造型を考える上で、谷崎が強く抱いていた前近代的なものへの関心を考慮に入れてもよいはずである。しかし「日本的」「前近代的」な要素をナオミに見出した研究はほとんど見られなかった。三節では先行研究であまり触れられてこなかった「日本的」「前近代的」な要素に触れつつ、ナオミの人物造型についての検討を行う。

三 ナオミに見出せる日本の毒婦的要素

三・一 ナオミの毒婦性

前節に挙げたような点からナオミは「西洋」という構図が生まれるのはごく当然のことであるように思われる。しかし、ナオミの言葉や行動に改めて注目し、彼女の人物造型について考えてみると、彼女には、日本の江戸から明治期の文学にしばしば現れた「毒婦」的側面が見出せることをここで指摘したい。

そもそも毒婦物とは何か。毒婦物は江戸後期から明治初期の歌舞伎狂言や文学におけるジャンルの一つで、「市井の事件や歴史上の人物に取材した実録物ないしはその系列の小説を、題材によつて分類する場合の名称で、奸婦、姦婦、淫婦を主人公にしたもの」⁽¹⁷⁾である。興津要氏の「明治開化期文学集解説」⁽¹⁸⁾によると、文学における毒婦物のルーツは、明治初期に登場した小新聞であるとされる。庶民を対象にし、通俗性を持った小新聞とその記事は、次第に報道性より文学性を追求するようになっていく。そこで生まれたのが、実際の事件・人物を題材とする実録性を備えつつ、文体に工夫を加え脚色し、読み物へと進展させた「続き物」や草双紙合巻であった。毒婦はその起伏に富んだ人生から続き物の題材として読者に支持を受け、多くの毒婦物が書かれるようになったとされている。毒婦物の代表的な作品とそこに登場する毒婦には、久保田彦作『鳥追阿松海上新話』⁽¹⁹⁾、お松、岡本勘造『夜嵐於衣花廻仇夢』⁽²⁰⁾、お絹、仮名垣魯文『高橋阿伝夜刃譚』⁽²¹⁾、お伝などがある。また歌舞伎や講談など様々なジャンルでその題材となった代表的な毒婦として「姉妃のお百」なども存在する。美しい女性がその美貌を武器に、次々に男を騙したり盗みをしたり、時には殺害などの悪事を重ねながら生き抜いていくが、最終的には捕らえられこれまでの報いを受ける、というのが毒婦物の

主な筋立てである。そこに共通する特徴としては、毒婦が貧しく複雑な家庭で生まれ育った人物であること、毒婦が何らかの悪事をはたらき、関係した男性に被害を与えること、その動機が利己的であり明確なこと、毒婦が好色で、男を惹きつけやすい性質を持っていること、毒婦が最終的には悪事の報いを受ける勧善懲悪ものとして書かれていること、毒婦が男勝りな振る舞いを見せることなどが挙げられる。

野口氏は、「毒婦物の系譜」⁽²²⁾において、毒婦について「暗い蠱惑力をもって男をひきつけ、男をほろぼし、やがては自分も破滅するあの「死をもたらす女」の主題の輪郭」が浮かび出ていると述べている。毒婦は、「宿命の女」と同系統の人物像と見ることができると述べている。

以上を踏まえた上で、「痴人の愛」と先述した毒婦物の特徴を照らし合わせて、ナオミの毒婦性について考えていく。この二つに明らかに共通する特徴としては、毒婦が貧しく複雑な家庭で生まれ育った人物であること、その動機が利己的であり明確なこと、毒婦が好色で、男を惹きつけやすい性質を持っていること、毒婦が男勝りな振る舞いを見せることが挙げられる。まず毒婦が貧しく複雑な家庭で生まれ育った人物であることについてである。代表的な毒婦物の例を挙げると、非人の娘である『鳥追阿松海上新話』のお松、両親の不貞の末に生まれた私生児である『高橋阿伝夜刃譚』

のお伝など、毒婦は貧しい家庭の育ちなどといった、複雑な出生を持つという設定がなされ、それが毒婦的性質の要因とされているものが多く見られる。同じように、ナオミも決して恵まれた育ちではないということが作中からうかがえる。彼女の実家は浅草・千束町で「銘酒屋」⁽²²⁾を営んでいる。彼女はそんな実家を疎ましく思い、「自分の家庭の事情を聞かれると、ちよつと不愉快な顔つきをして、言葉を濁してしま」(二〇五頁)う。また譲治はナオミを引き取る直前、その相談をしに彼女の实家へ向かうが、当の家族はナオミにほとんど関心を示さない。譲治が「世の中には随分無責任な親や兄弟もあるものだ、私は、つくづくと感じました」(二一〇頁)と語る通りである。ナオミの不貞が発覚した後、その相手の一人である浜田が、その「卑しい家業」を知って、「ナオミさんには生れつき淫蕩の血が流れてゐたんで、あゝなる運命を持つてゐたんですね」(四二二頁)と語っている。この通り、ナオミの好色な性質はその生まれによるものだとされている。この点も、毒婦と類似している。

次にその動機についてである。ナオミは数々の我が儘や浪費、不貞をはたらき、譲治を呆れさせながらも、その肉体的魅力と甘い言葉で、彼を自分の思うままに操っていく。そのように振る舞うことの狙いは何か。以下は物語の終盤、譲治を肉体的、精神的に支配したナオミが、彼に自分への服従

を誓わせる場面である。

「これから何でも云ふことを聴くか」／「うん、聴く」
／「あたしが要るだけ、いくらでもお金を出すか」／「出す」／「あたしに好きな事をさせるか、一々干渉なんかしないか」／「しない」(中略)「ときどきダンスに行かしてくれませんか」／「うん」／「いろ／＼なお友達と付き合つてもいい？」もう先のやうに文句を云はない？」
／「うん」(中略)「仕事の方へみんなお金を注ぎこんだまつちやイヤだよ、あたしに贅沢をさせるお金を、別にして置いてくれなけりや。いゝ？」／「あゝ、いゝ」
(中略)「それからまたよ、——もうさうなつたらこんな家にはゐられないから、もつと立派な、ハイカラな家へ引越して頂戴」／「無論さうする」／「あたし、西洋人のゐる街で、西洋館に住みたいの、綺麗な寝室や食堂のある家に這入つてコックだのボーイを使つて、——」(中略)／私は始めて彼女に深いたくらみがあつたのを知りました。ナオミは最初からさうする積りで、計画を立て、私を釣つてゐたのでした。(四五七—四六〇頁)

以上から、ナオミは経済的に保障され、また自由な生活を

手に入れるために、讓治を服従させていることは明らかである。先述したようにナオミは自身の育ちに劣等感を抱いていた。

千束町で卑しい稼業をしてゐる実家、その娘だと云はれることをひどく嫌つて、親兄弟を無智な人種のやうに扱ひ、めつたに里へ歸つたことのない彼女。(三九六頁)

卑しい家業や、自身への愛情も薄く無関心な家庭にコンプレックスを抱いていたナオミは、そんな家族とは対極的な讓治を利用し、下層からの脱却を図つたのだと考えられる。毒婦物の毒婦たちも、その悪事の多くは生活の貧しさを背景とし、経済的な安定を得ることをその目的としている。支配の動機が明確かつ自己本位、生活の安定を狙つたものという点で、ナオミの生き方は毒婦たちの姿と重なる部分がある。

次に好色で、男を惹きつけやすい性質を持つてゐる、という点に関しては、ナオミは十分に当てはまつていると言える。その好色ぶりに関しては、「彼女はもと／＼多情な性質で、多くの男に肌を見せるのを屁とも思はない女」(四四一頁)という記述の他、彼女と直接接したことのない讓治の会

社の同僚までもが「何でも偉い發展家ださうだぜ、その女は盛んに慶応の学生なんかを荒らし廻るんださうだから。」(三二六頁)と語るほどであり、讓治だけでなく、多くの男を誘惑し遊び回つてゐる様子がうかがえる。

最後に毒婦が男勝りな性質を見せることについてである。明治初期の毒婦物における毒婦造型の分析を行ったダラム・ヴァレリー氏は、作中に「大胆不敵」や「男勝り」、「女に似合わぬ」など毒婦の男性的性格や振る舞いを表す形容語句や、毒婦を描いた挿絵に膝を立てたり足を広げたりなど、他の女性には見られない男性的なポーズが毒婦の描写にはしばしば見られることに注目し、「身体の使い方にも現れた「男性」的な性格が悪婆、そして毒婦の一つの特徴のように考えられる」⁽²⁴⁾と述べている。こういった男性的な言動、振る舞いの描写は、ナオミにも見られる。

「ふん、威張るなよ！ あのピンク色の洋服と踊つてる恰好なんざあ、あんまりいゝ図ぢやなかつたよ」

驚いたことには、ナオミは此の男に向ふと、忽ちこんな乱暴な言葉を使ふのでした。(二九一頁)

ナオミは為る事成す事が活潑の域を通り越して、乱暴過ぎます。口の利き方もつんけんしてゐて女としての

優しみに欠け、やゝともすると下品になります。(二九九頁)

「あたしは男よ、女ぢやないわよ、浜さんだつて女のやうな気がしないつて云つたぢやないか」(三二五頁)

「男のやうに股を開いて枕の上にとつかと腰かけ」(三一七頁)、「男のやうな口調」(四五七頁)

何をもって「男性的」な性格と定義するかは議論の余地があるかと思われるが、「痴人の愛」においては、右に示したように男勝りなナオミの描写や、「女らしさ」の極み」(三〇八頁)として春野綺羅子という女優が登場し、そんな女らしい綺羅子とは対照的な存在としてナオミが比較されることで、ナオミの非・女性的⇨男勝りなイメージが形作られているように思われる。そしてこうしたナオミの荒々しい男勝りなイメージは、毒婦の振る舞いを彷彿とさせる。

以上、ナオミと毒婦との共通点について述べた。ナオミの性質や行動などの描写において、毒婦との共通点が浮かび上がってくる。一見西洋的、近代的なものを体現しているように見えるナオミであるが、彼女の出自や性質など人物造型の基礎をなす部分に、江戸末期から明治初期の日本の芸

術にしばしば登場した毒婦たちの影を見ることができるよう思われる。

三・二 要因

しかし、なぜナオミにこうした毒婦的側面が表れているのだろうか。まず、谷崎が草双紙や芝居の毒婦物に強い関心を抱いていたということが、ナオミの毒婦的人物像の形成に影響を与えたのではないかと考えられる。先行研究においても、谷崎の創作の根底に、幼少期から接してきた芸術体験が色濃く反映されているとする指摘はしばしばされてきた。

谷崎の毒婦物からの影響を見る上で、彼の初期作品に注目する。初期の谷崎は、東京の下町を舞台とした、江戸趣味的な作品を多く描いた。その中に、主人公やその他の登場人物の趣味嗜好を満たすものとして、毒婦の芝居や草双紙、講談本がしばしば登場する。「少年」⁽²⁶⁾では、主人公「私」に同級の信一が殺人の場面を描いた草双紙をいくつか見せる場面があるが、その中には「濃艶な寝間着姿の女が血のしたゝる剃刀を口に咬へ、虚空を掴んで足許に斃れて居る男の死に態をじろりと眺めて、「ざまを見やがれ」と云ひながら立つて居る」といった、毒婦物とみられるものがある。「続悪魔」⁽²⁶⁾では、「高橋お伝」や「佐竹騒動姐妃のお百」の

講釈本が主人公を強く惹きつけるものとして描かれる。「饒太郎」⁽²⁷⁾では、

せめてもの心遣りに「姐妃のお百」だの、「あたりやおきん」だの、「高橋おでん」だのと云ふ講談本を読んで見たり、宮戸座や蓬萊座や、六区の活動写真館などで演ずる俗悪な毒婦の芝居をこつそりと見に行ったり、そんな事をして自らます／＼病的な方面へ墮落して行つた。(二巻・三五八頁)

といった、主人公・饒太郎の姿が描かれている。「刺青」⁽²⁸⁾には、「女定九郎、女自雷也、女鳴神、——当時の芝居でも草双紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であった。」という一文が見られる。この「刺青」については、草双紙や芝居の毒婦物からの影響があることを、谷崎自身が認めている。このことは、田鎖数馬氏が『谷崎潤一郎と芥川龍之介——「表現」の時代——』において指摘している。

以下は「谷崎文学の底流」⁽²⁹⁾という座談会における谷崎の発言である。

谷崎 (略) 「刺青」はやっぱり草双紙の影響でしょう

ね。

編集部 ひところ「悪魔」(明治四十五年発表)にも書いていらつしゃいますけど、講談本をお読みになった時代がありますね。

谷崎 読みましたね。それから沢村源之助というああいう役者がいましたからね。あれは久保田万太郎君なんかずいぶん見に行つたほうだけど。宮戸座ね。ああいう芝居の影響はずいぶんあるでしょうね。

「ああいう芝居」とは毒婦物の芝居を指していると考えられる。

私はやゝ成長して、一人で芝居見物に出かけるやうになつてから、しばしば浅草の宮戸座へ四代目澤村源之助が得意としてゐた毒婦物を見に出かけたが、彼が扮する「切られお富」や「女定九郎」の妖艶さは長く記憶にとゞまつてゐて忘れることができない。

谷崎のエッセイ「四季」⁽³⁰⁾からは、四代目沢村源之助の演じる毒婦物の美しさが彼の印象に強烈に刻み込まれた様子が見える。これらの谷崎の発言を踏まえて、田鎖氏は「刺青」について草双紙や芝居、また講談本の毒婦物を母体

として作り上げられたものであると述べている。また笠原伸夫氏は、谷崎が東京の日本橋に生まれ育ち、江戸の伝統文化様式を受容してきたことが彼の文学の基本を形作ったとし、

幼時体験としてあつた浮世絵も歌舞伎も草双紙も、あるいは（毎月の八の日の縁日に、裏茅場町の夜の闇）『幼少時代』にみた悪夢ともいえる、血みどろの茶番狂言にしても、かれの資質の深部を彩る無意識のちららにほかならなかつたのである。(31)

と述べている。草双紙や講談本、芝居を通じた毒婦物の鑑賞体験が、谷崎自身の創作においても大きく影響を及ぼしてきた。それを踏まえると、「痴人の愛」においても、こうした傾向が現れているとは考えられないか。「文豪秋の夜話昔の女今の女」(32)と題された座談会において、谷崎はナオミのモデルについて次のように発言している。なお引用中の佐藤は司会の佐藤観次郎を指す。

佐藤 谷崎先生もいろいろあつたようですが「痴人の愛」のナオミなんかモデルがあつたんでしょう。

谷崎 モデルみたいなものは、一人の特定のモデルは

ないけれども、みんななかからとっている、それはありますよ。

特定のモデルについては否定している(33)が、彼がこれまでに経験したこと、見聞きしたことをもとにナオミの人物像が作り上げられたと考えることができる。そして谷崎が受けた創作へのインスピレーションに、毒婦物の存在があつたことは間違いない。ナオミの人物像に関しても、毒婦のイメージがその下地となつている可能性は十分に考えられるだろう。

そして、谷崎の文学世界に通底するテーマの面からも、ナオミに毒婦的要素が備わっていることの意味について考えていきたい。まず、「饒太郎」の記述を次に示す。

今かりに二人の美人があつて、一人は善人の性格を持ち、一人は悪人の性格を持つとするね。其の場合に執方が余計美人に見えるかと云へば、必ず後者——悪人の方が遙かに立ち勝つて見えるものなんだ。つまり善人よりも悪人の性格の方が、『美』を遺憾なく発揮するのに適当して居る訳なんだ。(二巻・三一九頁)

これは物語の主人公、饒太郎が「美」と「悪」の関係につ

いて語る場面である。ここに見える、「悪」のもとに「美」が輝くという考え方は、「饒太郎」だけでなく、谷崎文学における根本的なテーマの一つとも言える。これは「鬼の面」⁽³⁴⁾ においての「自分には『善』よりも『悪』の方が余計美しく感ぜられる。」(四巻・三五二頁)といった記述からもうかがえる。こうした傾向は「痴人の愛」にも現れている。ナオミの不貞に対して譲治が激昂し「出て行け！」と叫んだ直後の、彼女が見せた表情の描写に、そのテーマを見ることができる。

ナオミがじいツと視線を据ゑて、顔面の筋肉は微動だもさせずに、血の気の失せた唇をしつかり結んで立つてゐる邪悪の化身のやうな姿。——あゝ、それこそ淫婦の面魂を遺憾なく露はした形相でした。(二九〇頁)

「邪悪の化身のやうな姿」と表現しながらも、譲治はこのナオミの表情に強烈な美しさを感じ、「彼女の体と魂とが持つ悉くの美が、最高潮の形に於いて発揚された姿なのです。」(三九三頁)とまで形容する。またこの一連の流れを皮切りに、譲治がナオミへの崇拜感情を一層強めていくことから、この「邪悪の化身のやうな姿」は彼女の美を引き立てる効果があると言える。このように、谷崎特有の「美」と「悪」

の関係性は、「痴人の愛」においても表現されていると考えられる。

以上から、ナオミの人物像に毒婦物に倣ったいくつかの毒婦的要素を重ねることで、ナオミの「美」をより強く、抗いがたいほどのものへ高めようとした、ということが要因として考えられるのではないか。ナオミの人物造型において、自らの生活の安定・向上を図るという自己本位の都合、いわば生き抜くために男を破滅させていく、毒婦的な「悪」の要素を反映させることで、彼女の美をより強調する試みがなされているのではないかと推測する。

草双紙や芝居の毒婦物の影響が作者自身により明言された「刺青」や、毒婦物が作中に登場した諸作品と比べると、「痴人の愛」と毒婦物の間には明確な関連があると断言することは難しいが、谷崎自身の趣味・関心や、文学の中に表現されたテーマから、「痴人の愛」ナオミに毒婦的側面が備わることへの妥当性を見出すことができるのではないか。

三・三 ナオミと毒婦との相違について

ここまでナオミと毒婦の共通点に注目してきたが、ナオミの人物像を捉えるために、その相違点についても考えておく必要があるだろう。まず、毒婦が何らかの悪事を働き、関係した男性に肉体的、精神的被害を与えるという特徴に

ついでである。ナオミの不貞が原因で讓治に精神的苦痛を与えたこと、浪費により金銭的負担を強いるという点では「痴人の愛」はこの特徴に該当すると言える。実際に讓治もナオミのそういった行動には疑問と憎しみを抱いていた。

しかし、被害者の意識について考えてみると、そこに重要な相違が見られる。作品全体の流れを踏まえて考えると、ナオミの一番の悪事とは、讓治を誘惑し服従させ、かつて「聖人君子」とまで称された彼を墮落させたことにあると言える。そしてナオミの悪事は彼女の気質である「浮気と我が儘」によつて讓治が翻弄されていったことによるものである。

彼女の浮気と我が儘とは昔から分つてゐたことで、その欠点を取つてしまへば彼女の値打ちもなくなつてしまふ。浮気な奴だ、我が儘な奴だと思へば思ふほど、一層可愛さが増してきて、彼女の畏に陥つてしまふ。(四六四頁)

しかし、彼女の気質や振る舞いは作中の他の人物や読者とといった第三者目線から見ると「悪」であるように見えるが、讓治はまた違った捉え方をしている。ナオミがその悪事を成し遂げた時点で、讓治は彼女を完全に崇拜してしまつており、自分が破壊させられたことへの憎悪や怒りなどの被害

害者意識は持つていない。以下は作品の締めくくりの部分であるが、

此れを読んで、馬鹿々々しいと思ふ人は笑つて下さい。教訓になると思ふ人は、いゝ見せしめにして下さい。私自身は、ナオミに惚れてゐるのですから、どう思はれても仕方がありません。(同頁)

と讓治自身が語っている通りである。事実、ナオミはその「悪」によつて讓治に経済的、精神的被害をもたらしていることは明らかであるが、讓治の視点から見ると、彼には許容の気持ちがあり、自分を被害者とは認識していないことがうかがえる。ナオミの「悪」は、讓治の受け止め方にその性質や程度が左右されるものであると言える。一方、毒婦の行う悪事とは、殺人や窃盜、詐欺などの犯罪であり、最後には法で裁かれる、揺るぎない客観的な「悪」であり、被害者側に許容の感情は見られない。この二つには、被害者の意識に大きな違いがある。

結末についても、毒婦とナオミは全く異なっている。毒婦物は勸善懲惡であるが、「痴人の愛」はそうではない。毒婦は犯罪など客観的な「悪」を意識的に行使し、被害者が生まれ、最後には裁かれる。読み手や物語中の第三者、そしてま

た当事者もみな毒婦のことを悪女であると認識し、断罪する。一方「痴人の愛」では、ナオミは「淫婦」「娼婦」「不貞な、汚れた女」(三八二頁)とされているが、そのことへの断罪には至らない。先に挙げた場面からも分かる通り、ナオミの方は彼女自身の気質である「浮気と我が儘」によつて譲治を精神的に翻弄しているだけであり、毒婦のように直接男に危害を加えようといった悪意は見られない。また当の譲治はナオミに対して受け入れの気持ちがあるため、罰を受けることはない。また特に後半部分では、譲治視点によるナオミを崇拜する心の描写などを通して、まるで男を翻弄し破滅させることは「悪」ではないという印象を与えるような描き方がされている。読み手や物語中の第三者が、ナオミを「毒婦同様の悪女だ」と見なす可能性はあつても、当のナオミに「悪」の意識がなく、譲治の側にも「悪」に狂わされたという認識がされていないのならば、この二人の間に「悪」は存在したと言えるのだろうか。悪の性質や意識的な「悪」の有無、ここにナオミと毒婦の間の決定的な相違点があると考えられる。

また先に共通点として言及した、動機が利己的かつ明確であるという点に關しても、その中に相違が含まれていることを確認しておかなくてはならない。確かに毒婦もナオミも、生活水準の向上・安定がその行動の根本に存在するが、

ナオミの場合はそれに加え、自由の獲得があると考えられる。最終的にナオミは譲治を服従させることにより、自由で贅沢な生活を確保することができたが、当初、ナオミはそういった強い立場にはなかつた。元々ナオミはカフェの女給見習いとして親に奉公に出されていた少女という、経済的にも社会的にも弱く未熟な立場であり、自由とは程遠い環境にあつたと思われる。また譲治に引き取られてからも、しばらくは譲治の庇護・支配下のもとで過ごさなくてはいけない状況にあつた。

考へて見れば私たちが大森へ巣を構へてから、既に足かけ四年になります。そしてその間私たちは、夏の休みを除く外は此の「お伽噺の家」に立て籠つてひろい世の中との交際を断ち、いつも／＼二人きりで顔を突き合はせてゐたのですから、いくらいろ／＼な「遊び」をやつて見たところで、結局退屈を感じて来るのは無理ありません。(二五六頁)

このように譲治に引き取られても、ナオミは初めから自由になれたわけではなかつた。また「ナオミが来てくれたらば、彼女は女中の役もしてくれ、小鳥の代わりにもなつてくれよう」(二〇〇頁)という記述には、ナオミは自分の所有

物であり、都合のよい存在として捉える讓治の様子が映し出されている。一応はナオミ自身の意思や自由を尊重しようとはするものの、結局は彼女の行動も趣味も、讓治の趣味嗜好によりあらかじめ選別されたものである。また二人の暮らす家は、「鳥籠」(二一六頁)、「小鳥の籠」(二五七・二七五頁)と譬えられている。当初のナオミは、「巢」「鳥籠」に閉じこもっていないくはならない「小鳥」のような、自由が与えられない存在であったのである。こういった環境から、ナオミは自由を求めたと考えられる。

ここまで、「痴人の愛」ナオミと毒婦の比較を行った。両者の共通点としては、貧しく複雑な家庭で生まれ育った人物であること、動機が利己的であり明確なこと、好色で、男を惹きつけやすい性質を持っていることがある。ナオミの毒婦との共通性から、ナオミの性質について日本の毒婦的要素を認めることができる和思考。一方、相違点としては、勧善懲悪ものであるかどうかという違いがある。また悪事をはたらき男性に被害を与えるという点については、女が男に被害を与えるというプロットはこの二つに共通しているものの、悪や被害に対する当事者意識の面では大きな違いがあることを指摘した。このような相違についての考察から、ナオミと毒婦にはその「悪」の性質や意識的な「悪」

の有無という面において違いがあるということを示した。また、ナオミは讓治を翻弄させるその動機に、生活水準の向上・安定に加え、自由への希求があることを指摘した。これは毒婦物には見られない側面でもある。本節で指摘した「痴人の愛」での「悪」の取り扱い方や自由への執着といった、非・毒婦的な要素については、西洋の「宿命の女」の影響が少なからずあると思われる。この問題については、次節で検討していく。

四 ナオミと西洋の「宿命の女」

四・一 ナオミと「カルメン」の共通項

これまでナオミにおける日本の毒婦的な面について考察を進めてきたが、「宿命の女」としてのナオミの人物造型を考える上で、西洋の「宿命の女」との関わりについても考えておく必要があるだろう。これまでに「痴人の愛」と西洋の「宿命の女」との関わりについて、アベ・プレヴォ『マノン・レスコー』との比較検討がなされている³⁵⁾。確かにこの二つは男女それぞれのあり方に共通項を見出すことができ、興味深い比較対象である。しかし、アベ・プレヴォや『マノン・レスコー』について言及した谷崎のコメントや資料などは見当たらず、「痴人の愛」との関連があるかどうか定かでは

ないため、本論では『マノン・レスコー』については参考程度に留め、実際に「痴人の愛」作中に登場する、プロスペル・メリメ「カルメン」⁽³⁶⁾を比較対象とし検討していく。「カルメン」は「宿命の女」を取り上げた作品として知られる。讓治が浮気をしたナオミを憎み、「出て行け！」と怒鳴った直後の場面で、ナオミとカルメンと重ね合わせるような記述が見られる。

その瞬間、私は実にナオミの顔を美しいと感じました。女の顔は男の憎しみがかゝればかゝる程美しくなるのを知りました。カルメンを殺したドン・ホセは、憎めば憎むほど一層彼女が美しくなるので殺したのだと、その心境が私にハツキリ分りました。(三八九〜三九〇頁)

ここではナオミをカルメンに、讓治が自身をカルメンに翻弄される主人公ドン・ホセに重ねている。この「カルメン」のくだりは「痴人の愛」の二人の関係性を端的に表すものであるし、また讓治がナオミを自分にとつての「宿命の女」と自覚しているという明確な証拠にもなり得る。また「痴人の愛」の人物造型において、「カルメン」が何らかの影響を及ぼしている可能性も考えられる。参考までに、「カルメン」のあらすじを以下に示しておく。貴族出の真面目な青年伍

長ドン・ホセは、美しいジプシーの女カルメンと出会う。最初はカルメンに侮蔑的な目線を向けたドン・ホセであったが、次第に彼女に強く惹かれていった。そうして激しい恋心に我を忘れた彼は、カルメンの愛を手に入れるため、決闘や殺人、盗みなどの悪事をはたらき、兵隊の伍長から密輸業者密輸業者から泥棒と、たちまち墮落していつてしまう。しかし自分の身を捧げてカルメンを愛するドン・ホセを後目に、カルメンは彼を気に掛けるような言動をしばしば見せはするものの、決してドン・ホセのものになるうとはしない。しびれを切らしたドン・ホセは、カルメンへの怒りと憎しみのあまり、彼女を殺してしまう。

本節では、毒婦物と同様に「痴人の愛」と「カルメン」の比較検討を行い、ナオミの人物造型の特徴を洗い出していきたい。この二作品の女性像に共通するものにはまず、その行動の根底には常に自由への希求が存在することが挙げられる。これは三節でナオミに見られる特徴として挙げたものである。カルメンはドン・ホセを騙したり犯罪をそそのかしたりはするが、日本の毒婦とは異なり、男の存在を疎ましく思つてのことではない。カルメンは、常に自由を追い求める存在である。「わたしはうるさいことを言われたり、命令されたりはまっぴらだよ。わたしの願いは、自由にしておいてもらって、勝手なことがしていいんだ。」(九九頁)、「だ

けどカルメンはいっだって自由な女よ。」(一一〇頁)などと、そのことを作中で彼女自身が度々主張している。またドン・ホセがカルメンに、「アメリカの新天地に堅気の生活を求めよう」と相談を持ち掛けたとき、彼女は「わたしたちはキャベツやにんじんを植えつけたりするために生れてきたんではないんだよ。」(一一〇頁)と定住を拒否することからも、カルメンの自由への執着をうかがい知ることができる。この自由への執着は、彼女がジブシーであることに起因すると作中では語られている。「ジブシーにとつては自由が人生のすべてです。たった一日の入牢を避けるために、大都市一つを焼きはらうぐらいのことは、やりかねない種族です。」(五八頁)という記述にそれが現れている。誇張した表現で、それがジブシーという生まれによるものということが説明されている。

また次も三節で触れた、女の「悪」についてである。ナオミは、毒婦と違つて相手に直接危害を加えようとする意思は持たない。カルメンは、自身の入牢を回避するためにドン・ホセに嘘をついたり、不正に釈放をさせようとそれの考えたりはするものの、ナオミと同様ドン・ホセを殺そうと考へたり、金を奪つてやるうとは思っていない。悪事をドン・ホセや周りの男にそれとなくそそのかすことはあるが、カ

ルメンにとつて、ドン・ホセは自由獲得のための協力者とも言える存在であるため、意図的に彼をほろぼそうとはしない。ナオミもカルメンも、自らの自由を手に入れようとするあまり男を自己本位に利用し翻弄するが、そこに男への直接的な悪意は見られないのである。意識的な「悪」の有無で言えば、ナオミと同じくカルメンはそういった「悪」を持っていないと考えられる。

また「宿命の女」がエキゾティックな美貌を持つているという点も共通する。毒婦に関しても、美しい女とする記述は見られるが、ナオミとカルメンについては、その容貌の異国的な要素が特に描写されている。ナオミに関しては既に二節で取り上げた通り、その西洋的な美しさについて繰り返し説明されている。またカルメンに関しては、ドン・ホセではなく考古学者の「私」によつて肌の色、眼の形、唇と歯並び、黒い髪といった、容貌についての説明がされている。この説明は、物語本編の後ろに付け加えられているジブシー論の中の容姿についての説明に依つたもので、ジブシー特有の容貌の特徴がカルメンに現れていることを示唆している。

他には「宿命の女」の育ち、出自が否定的に描かれている点、「宿命の女」が好色な性質を持つているという点も共通項として見られる。これらは三節で述べた通り、日本の毒婦

の特徴にも重なる。

また、この二作品においては、女性像以外の共通点もいくつか指摘できる。まず作品の語りの構造についてである。

「痴人の愛」も「カルメン」も、男側の視点から物語が語られているという点で共通している。「痴人の愛」の冒頭で「私はこれから、あまり世間に類例がないだらうと思はれる私達夫婦の間柄に就いて、出来るだけ正直に、ざつくばらんに、有りのまゝの事実を書いて見ようと思ひます」（一九七頁）と譲治自身が語っている通り、この作品は譲治自身による記録という体裁で書かれている。「カルメン」は、考古学者である「私」による、ドン・ホセの体験の聞き書きという体裁を取ってはいるが、その聞き書き部分はほとんど全てがドン・ホセによる一人称視点の回想という形で書かれている。

次は、男が元々真直で真面目な人物であったという点である。「痴人の愛」の譲治は、

先づ模範的なサラリー・マン、——質素で、真面目で、あんまり曲がなさ過ぎるほど凡庸で、何の不平も不満もなく日々の仕事を勤めてある、——当時の私は大方そんな風だったでせう。「河合譲治君」と云へば、会社の中でも「君子」との評判があつたくらいですから。

(一九九頁)

と自身の性格を振り返っている。この部分だけでなく中しばしば登場するこの「君子」という言葉は、「学識・人格ともに優れ、徳行のそなわつた人」⁽³⁷⁾を指しているが、譲治の場合はそれに加え、「元来が田舎育ちの無骨者なので、人付き合ひが拙く、従つて異性との交際などは一つもなく、まあそのために「君子」にさせられた形だった」(二〇〇頁)とある通り、女性経験に乏しいという否定的なニュアンスも込められている。「カルメン」のドン・ホセも、周囲の人々が怠ける中自分のみが一心に仕事に打ち込んでいた、当初カルメンの浮ついた態度を受け入れることができなかったなど、自身のことを真面目で勤勉であったというように語る描写が見られる。そしてこれら男の真面目さについての言及は作中に繰り返し登場する。この二作品は、どちらも先述の通り男側の視点で語られたものであるため、ここから男たちの自己評価の高さや信頼が垣間見える。また理性的な男の姿をあらかじめ描写しておくことで、女による破滅前後のギャップを際立たせ、加えて「宿命の女」の持つ魅力や魔性が、男が自身の美点として備えていた理性や潔癖さを無力化してしまう、極めて強力なものであるということ強調しているように思われる。

また、毒婦物では女の理性の欠如や人格の異常性がクロースアップされるが、「痴人の愛」と「カルメン」ではそれと対照的に、男の理性の崩壊が物語の主題となっている。「カルメン」ではドン・ホセがカルメンに惹きつけられはじめたときのことを以下のように語る。

私はもう正気をなくしていました。どうにでもなれという気になっていました。(中略)とにかく私は酔っぱらいみたいになっていました。ばかなことをしゃべりだしていました。もう一歩でばかなことをやりだしかねないところまできていました。(五四頁)

そして、理性の崩壊の先に待つのは男女の立場の逆転と女性への服従・崇拜である。出会った当初、男は女のことを賤しく愚かな、また未成熟な存在として見下していたが、関係が進展するにつれて男が自分より下の立場であったはずの女に跪き、献身的に尽くすようになる。

「僕の可愛いナオミちゃん、僕はお前を愛してゐるばかりぢやない、ほんたうを云へばお前を崇拜してゐるのだよ。お前は僕の宝物だ。僕が自分で見つけ出して研きかけたダイヤモンドだ。だからお前を美しい女に

するためなら、どんなものでも買ってやるよ。僕の月給をみんなお前に上げてもいいが」(二三三〜二三三頁)
ドン・ホセはカルメンの前では、「あの女のどんな気まぐれにも服従してしまう」(七八頁)と話し、

あの女の気に入るために、このまま山賊かせぎを続けてもよいとまで譲歩しました。あの女がこのうえ私を愛しつづけてくれるなら、何もかも捧げつくす気持ちにまたなっていました。(二二一頁)

とも語っている。このような展開は「痴人の愛」と「カルメン」に共通して見られる。ただ、「痴人の愛」も「カルメン」も女性に対する服従が描かれているが、「痴人の愛」では服従とともに女性を超越的な存在と見る崇拜意識がより強調されており、ここには谷崎の文学における恋愛についての理念が影響していると考えられる。この点について詳しくは後述する。

四・二 相違点

一方「痴人の愛」と「カルメン」の相違については、その結末と被害者の「悪」の受容の仕方が挙げられる。カルメン

は最終的にドン・ホセによって殺される、勧善懲悪の結末である。それは、カルメンを手に入れるため、自分の地位や理性を犠牲にしてきたにもかかわらず、報われることはないという強い憎しみにとらわれた上での報復である。讓治のような、許容や受け入れの感情はドン・ホセには見られない。カルメンの男に対する翻弄は、意識的なものではなくても、最後に報いを受ける「悪」として扱われていることが分かる。

四・三 ナオミの人物造型における西洋的影響

以上「カルメン」を一例に、西洋の「宿命の女」像とナオミを比較した。その上で改めて注目したいのは、この二つに共通する「男に崇拜される女性像」と、「自由の追求」である。この要素については、先行研究において『マノン・レスコー』とも共通して見られるものであった。ナオミに見られるこの二つの要素は、「カルメン」や他の西洋文学流入の影響が反映された部分なのではないかと考えられる。なぜナオミに西洋の「宿命の女」的女性像が見出せるのか、谷崎の西洋文学にまつわる言説を取り上げつつ説明していくことをこの節の目的としたい。

まず女性崇拜の意識について考えていきたい。谷崎の文学における恋愛についての考えを前提とするため、「饒太郎」に書かれた恋愛についての一文を以下に示す。

饒太郎の恋と云ふものは、男女相愛の関係から発生するのではなく、男は女を愛し敬ひ、女は男を虐げ卑しめるときに生ずるのであつた。(二巻・三六〇頁)

こうした恋愛の形は、「饒太郎」のみに限つたものではない。「痴人の愛」はもちろん、「捨てられる迄」⁽³⁸⁾「春琴抄」⁽³⁹⁾や、晩年に書かれた「瘋癲老人日記」⁽⁴⁰⁾などにも現れており、こうしたマゾヒズム的な恋愛のあり方は、谷崎文学の一貫したモチーフと言える。これはもちろん、先述したような毒婦物からの影響、谷崎自身の趣味嗜好も反映されているだろう。しかしそこに西洋文学から受けた影響が全く絡んでいないとは言いがたい。ここで谷崎のシャルル・ボードレールへの関心に注目したい。北村卓氏は谷崎がボードレールから受けた影響を「谷崎の創作過程においてきわめて重要な位置を占め」たものとし、「谷崎特有のマゾヒズムやイデア論の形成と密接にからまりながら、現実の姿を取った永遠の美の女神に拝跪する道化||痴人(愚人)||芸術家という図式を構築するに当たり、決定的とも言える役割を果たし」、そこを起点として「痴人の愛」を完成させたと述べている⁽⁴¹⁾。谷崎はボードレールに関心を持ち、その散文詩の英訳の和訳を行っている。その際、元の英訳本の巻頭に載せられていたテオフィル・ゴーチエの序文から特に関心

を引いた箇所を、「ボオドレエルの詩」⁽⁴²⁾ という文章の中にまとめている。

成る程彼は人間の墮落、頹廢、罪惡に關して不思議な誘惑を感じ、常にその美を歌つたけれども、彼は寧ろ其の美を通して、その美の奥に潜む永遠に憧れ不滅を慕うて居たのであつた。彼に美感を齎す所の地上のもろもろの現象は寧ろ永遠の實在、——永遠の美の表徴に過ぎなかつた。(四卷・四九四頁)

文中の「彼」とはボードレールのことを指す。これは、三節で述べた「惡」のもとに「美」が輝くという谷崎的主題に通じる記述である。これらから、谷崎はボードレールの「惡」や「美」、そこからもたらされる永遠性といった芸術觀に影響を受け、また共鳴していたと考えられる。そうすると、女性の「惡」の中にある「美」に陶醉し、實在を超えた超越者として女性を捉えその足下に跪く、というのが谷崎文学における「恋愛」と考えることができるだろう。「痴人の愛」における「恋愛」は、讓治が「邪惡の化身」と化したナオミに「最高潮の形に於いて發揚された」「悉くの美」を見出し、たのをきつかけに、急激に進展する。

たつた一時間前まではあれほど彼女を荷厄介にし、その存在を呪つた私が、今は反対に自分を呪い、その軽率を悔いるやうになつたと云ふのは？ あんなに憎らしかつた女が、こんなにも恋しくなつて来るとは？ (三九三頁)

そしてナオミは超越的な存在へと変貌していく。

私の胸にはたゞ今夜のナオミの姿が、或る美しい音楽を聴いた後のやうに、恍惚とした快感となつて尾を曳いてゐるだけでした。その音楽は非常に高い、非常に清らかな、此の世の外の聖なる境から響いて来るやうなソプラノの唄です。(中略) 今夜のナオミは、あの汚らしい淫婦のナオミ、多くの男にヒドイ仇名を附けられてゐる売春婦にも等しいナオミとは、全く両立し難いところの、そして私のやうな男はたゞその前に跪き、崇拜するより以上のことは出来ないところの、尊い憧れの的でした。(四三三頁)

以上からは、谷崎の持つ文学的テーマが「痴人の愛」にもはっきりと現れていることが分かる。ここまでに述べたやうな「恋愛」の表現を志した谷崎にとつて、「カルメン」な

どに代表される「宿命の女」の存在は大きな刺激となったのではないだろうか。男性が破滅的な魅力を持つ女性に翻弄され墮落するという筋立てを持つ「宿命の女」物語は、谷崎の表現しようとする「恋愛」と、親和性を持ったジャンルである。そして「宿命の女」は悪女と見なされることの多い女性像であるが、そのような点も、谷崎の文学的志向と合致したと思われる。「痴人の愛」そしてナオミの人物造型に関しても、西洋の「宿命の女」に着想を得た可能性は十分考えられる。

そして、谷崎にとつての「恋愛」を描き出すための原動力となつたのもまた、西洋文学の存在であつたと考えられる。谷崎は「恋愛及び色情」⁽⁴³⁾において、「西洋文学のわれ／＼に及ぼした影響」の最も大きいもの一つとして、「恋愛の解放」「性慾の解放」と述べている。かつて日本の平安期の文学に見られた女性崇拜の精神は、時代が変わり武士道が確立されるに従つて消え去り、女性を卑しめ、恋愛を懦弱なこととして貶める風潮に変化した。一方西洋の騎士道においては一貫して「武人の忠誠と崇拜の標的は「女性」にあつた」とし、そういった文化の中で作られた「高尚な恋愛文学」の存在が、明治以降の日本の文学界に大きな影響を与えたと述べている。「痴人の愛」のように、女性崇拜をその主軸においた恋愛を作品の中に描き出したのも、「恋愛の解

放」に則つたものであると言える。「痴人の愛」は、西洋文学がもたらした「恋愛の解放」「性慾の解放」が体现された作品なのではないだろうか。

次に、ナオミがなぜ自由への執着を持つ人物として描かれるのかについて考える。この点については、西洋文学の影響と合わせて、当時の日本の時代状況も考慮に入れて論を進めたい。以下は「恋愛及び色情」に書かれた谷崎の、当時の文学における女性像についての言及である。

文学は時代の反映であると同時に、時代に一步を先んじて、その意志の方向を示す場合もある。「三四郎」や「虞美人草」の女主人公は、柔和で奥床しいことを理想とした旧日本の女性の子孫でなく、何んとなく西洋の小説中の人物のやうな気がするが、あの当時さう云ふ女が多く実際にゐた訳ではないとしても、社会は早晩所謂「自覚ある女」の出現を望み、且夢見てゐた。私と同じ時代に生れ、私と同じく文学に志したあの頃の青年は、多かれ少かれ皆此の夢を抱いてゐたであらうと思ふ。(十六卷・一八九―一九〇頁)

これらは「恋愛の解放」と同じく西洋文学の影響の一つとして谷崎は述べている。「三四郎」や「虞美人草」の女主人

「公」はすなわち美禰子、藤尾のことを指している。彼女たちは、自らの進路を自分で定め、他人の支配下に甘んじようとしていない、自我を持った女性として描かれた。そして彼女たちも自由を求める女性たちであった。夏目漱石は、彼女たちのようにはっきり自我を持った女性を度々描いた。その背景について、今井洋子氏は、「たとえば『虞美人草』が書かれた一九一〇年ごろは（中略）『青鞥』に代表される『新しい女たち』の出現した時代、いわばフェミニズム運動の萌芽のような時代であり、「漱石自身少なからずこうした『新しい女たち』を意識して作品を書いている」としている⁴。「虞美人草」は明治四〇（一九〇七）年、「三四郎」は明治四一（一九〇八）年に発表されたので、明治四四（一九一一年）に創刊された『青鞥』より早い段階のものであるが、まさに女性のあり方について「時代に一步を先んじて、その意志の方向を示したものとと言えるかもしれない。谷崎の夢見た『自覚ある女』は、この時分に出現した女性の権利・自由を求める『新しい女』に通じる女性像のように思われる。当時の時代背景と、そこに現れはじめた西洋の、男性をその足下に跪かせる女性像の衝撃は、谷崎の文学における女性観、そしてナオミの人物造型にも影響を与えたのではないかと考えられる。「痴人の愛」ナオミも、「三四郎」や「虞美人草」の女主人公」と同じく、「柔和で奥床しい」とは違

った、自我を持ち自由を求める女性である。ナオミは、谷崎、そして当時の社会が夢見た「自覚ある女」が具現化された存在と考えることができる。

五 「痴人の愛」の特異性

ここまで「痴人の愛」について、毒婦物と「カルメン」との比較を行い、その女性像の検討を通してナオミ像の形成について考察してきた。これまでの比較を通して、毒婦や「宿命の女」を取り扱った諸作品とは少し変わった傾向が「痴人の愛」には見出せることを指摘したい。それは、「痴人の愛」は、讓治の墮落こそあれ、最終的にはナオミも讓治も各々の理想を実現し、ハッピーエンドを迎えるという点である。毒婦物や「宿命の女」が登場する作品は、勸善懲惡にのつとつた筋立てのものが少なくない。その中でも、毒婦は行為の凶悪性が咎められ、罰される結末を迎える。西洋の「宿命の女」は、無意識の「悪」ではあるが、カルメンのようにに殺されたり、マノン・レスコーのように自らも墮落の末に悲劇的な死を迎えたりと、最終的には「悪」の報いを受けてしまう。「宿命の女」においては女の思惑や意思というよりは、「男を破滅させてしまった」という結果が問題視されるのである。これら毒婦物や西洋の「宿命の女」物語には「男

を破滅させる女」の否定が生じている。しかし、既に本論に何度か示している通り「痴人の愛」ではこの否定は起こらない。本作では最終的に、ナオミと讓治の加虐―被虐、支配と服従の關係が確立されるまでに至っただけでなく、その關係の継続を示唆しつつ、物語は終わりを迎える。つまり「痴人の愛」には勸善懲惡とは真逆の展開が用意されており、毒婦物や従来「宿命の女」物語には見られなかった特色が現れている。これはなぜなのか。ナオミという「宿命の女」が生まれた背景を明らかにするため、本節で確認しておきたい。

まず「痴人の愛」のナオミと讓治の關係構築における重要な要素として存在する「教育」から考えたい。讓治はナオミを「何処へ出しても耻かしくない、近代的な、ハイカラ婦人」(二三七頁)とすべく教育する。その計画には「女中の役もしてくれ、小鳥の代りにもなつてくれよう」というように、最終的にはナオミを自分の妻に貰い受けたい、といった讓治の彼女に対する所有願望がうかがい知れる。以上から分かることだが、はじめから讓治はナオミを支配的な女に育てようと考えていたわけではなかった。女に虐げられたい、服従したいというマゾヒズム願望があったわけでもない。ナオミを教育していく中で、讓治自身も大きく変化を遂げたということが当然考えられる。「痴人の愛」の特徴の一つ

である男女の立場の逆転の根底にはこういった要因がある。次に近代社会における女性へのまなざしを踏まえた上で、「痴人の愛」の特異性を考えていきたい。水田宗子氏は、近代の歴史を「女性が、制度化され、封じこめられてしまった自我を、家庭外に出ていくことによつて解放してゆこうとした軌跡の歴史」とした。その上で、

十九世紀後半にかけて、家庭崇拜思想が高まり、母性としての女性の(本質)が異常な熱意をもつて語られた現象や、同時に、魔性の女に対する反感と恐怖と好奇心のまじった興味の擡頭、女性恐怖や女性嫌惡に集中する去勢恐怖などの倒錯心理現象などが文学的テーマとして追及されるようになる背景には、まぎれもなく女性の自我意識の高揚があり、また女性の目ざましい社会進出の現実があった。(45)

と述べる。またそういった女性の自我は当時の制度と男性の自我によつて「懐柔、密閉」されようとしていたと指摘する。「魔性の女に対する反感と恐怖と好奇心のまじった興味の擡頭、女性恐怖や女性嫌惡に集中する去勢恐怖」は「宿命の女」の否定が起こった背景と考えることができるだろう。また今井洋子氏は、漱石の「草枕」那美とフリオ・コル

タサル『石蹴り遊び』のラ・マガという二人の「宿命の女」は、「男性原理が描く女性の本質を象徴するもの」であり、自我を持ち男性の共同体に参加しようとしたゆえに否定され、「殺された」とする。そして、そこには女性嫌悪の意識が潜んでいると述べている。つまり、西洋でも日本でも、男性主体であった当時の社会において、自我を持った女性の登場は脅威であったと考えられる。女性が自我に目覚め、主体性を持って行動した結果、男性を翻弄するまたは破壊させることは、「悪」と認識された。女性が自我を持つこと自体が「悪」と見なされる社会構造があった。実際漱石は「虞美人草」の藤尾を「藤尾といふ女にそんな同情をもつてはいけない。あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。徳義心が欠乏した女である。あいつを仕舞に殺すのが一篇の主意である。」⁽⁴⁶⁾と断じる。毒婦物や「宿命の女」物語は、自我を持った女をすすんで創作の題材にとりながら、結局は女性たちを脅威としてほろぼすしかなかった。

しかし谷崎の場合はまた異なる事情があったと思われる。前述したように、女性の「悪」の中にある「美」に陶醉し、超越者としての女性を崇拜することを「恋愛」とした谷崎にとって、一般的に「悪」と見なされた自我を持つ女性は「恋愛」の上では理想的な役割を果たす存在であったのではないか。ここに「痴人の愛」が特異性を持ったゆえんが浮かび

上がってくる。男性主体の社会では、またそこで生まれ育った多くの男性作家は、「自覚ある女」の出現を意識しながらも、現実には彼女たちを脅威とみなし断罪するほかなかったのである。しかしマゾヒズム趣味とそれに伴う芸術理念を持つていた谷崎にとつては、「悪」に「美」を見出し「恋愛」へと昇華させることが彼の芸術の第一義であったため、その「悪」をほろぼしてしまつてはならなかった。「自覚ある女」やその「悪」は歓迎され、肯定されるべきものだったのである。谷崎のボードレールへの関心が高まった大正五年に書かれた「神童」⁽⁴⁷⁾には次のような記述がある。

奢侈も生意気も恋も虚言も、「美しきが故に」彼等は実行の特権を持つて居る。彼等の手管に欺かれるのは欺かれる者の愚かである。彼等の恋に感溺するのは溺れる者の罪である。「あらゆる悪事が美貌の女に許されなければならぬ。」——春之助は自然とさう云ふ風な考へに導かれて行つた。(三卷・三五二頁)

美しい女が正義であり、むしろそれに翻弄され溺れた者の方が愚かで悪いとする思想は、他の毒婦物や「宿命の女」物語に流れているものとは異なっている。「痴人の愛」において、ナオミは正義であり、彼女に溺れる護治は愚かな「痴

人」であった。「痴人の愛」には、「教育」の要素と谷崎の思想、この二つが大きく影響を及ぼし、独自の作品世界を作り上げていると考えられる。そこから「痴人の愛」におけるナオミ像形成の背景をうかがい知ることができるのである。

六 結論

最後に、本論で述べたようなナオミの女性表象が何を意味しているのか考察したい。結論から言えば、ナオミは谷崎による「近代日本の否定」の表象と見ることができると考える。ナオミは、毒婦という日本の前近代的女性像と、西洋的な「宿命の女」の要素を備える女性である一方、逆に近代日本に存在した規範的女性像、例えば家庭の中で夫や舅姑に従順に仕え、妻・母として家事育児にいそしむといった「良妻賢母」的特徴はほとんど見られない。むしろナオミの作中の振る舞いは、先述した近代の女性規範を全否定するかのようなものとなっている。掃除・洗濯、料理などの家事を嫌い、「お前、子供を生んでくれないか、母親になつてくれないか？」(三八四頁)という譲治の懇願を強く拒否する。良妻賢母像を譲治に求められても、それに反発しつづけるナオミの姿が描かれる。小山静子氏は、明治期の良妻賢母思想について、明治二〇年代から「知識による内助や「高い」

道徳性」(四五頁)を備えた良妻像が重視されるようになって述べている⁽⁴⁸⁾。これは当初譲治がナオミに求めていた要素でもある。しかし実際にはナオミはそういった良妻賢母像を真つ向から否定するかのような不道徳な女性として描かれている。近代日本の良妻賢母を徹底的に排除し日本・西洋の悪女像をナオミに重ねる。その要因としては、良妻賢母に代表される近代日本の女性像には、谷崎の求める「悪」の中の「美」を見出せなかったということが考えられる。従順に、家事や育児に勤しむ女性には、少なくともその特徴だけ見れば、何の「悪」の要素も見出すことができない。当時の日本にあるものでは、谷崎の芸術的欲求を満たすことはできなかつたのである。以下は谷崎の「独探」⁽⁴⁹⁾に書かれた文章である。

私は自分の胸の中に燃えて居る痛切な芸術上の欲求が、到底現代の日本に生れて日本人に圍繞されて居ては、満足されるものでないことを発見した。自分を生んでくれた現在の此の国土には、不幸にも自分の「美」に対する憧憬を、充たしてくれる何等の対象をも見出すことが出来なくなつた。(三巻・二三七頁)

そこで西洋が希求されていくのはもちろんであるが、洋

行経験のない谷崎にとって、西洋は手の届かない「彼岸的な対象」⁽⁵⁰⁾であった。谷崎は西洋の「色彩の強烈な、陰翳のない華麗」⁽⁵¹⁾で「大胆で活潑な」(「独探」二三八頁)芸術に接触し同化することを望みながらもそれは叶うことのない憧れであった。そのジレンマが、谷崎を前近代の産物への関心に向かわせた。

——あゝ己は西洋へ行きたいな。あんな荘嚴な、堂々とした婦人の肉体を見ることの出来ない国に生れたのは己の不幸だ。藝術が何だ、文学が何だ。こんなちっぽけな体格と、ぼんやりした色彩と、浅薄な刺戟しかない日本に居ながら、立派な藝術なんか出来るもんか。——
どうかすると、彼はこんな事を考へて、遙かに歐洲の花の都の巴里の夜を憧れたりする。さうかと思へば、宮戸座や常盤座あたりの人殺し芝居を熱心に拳を固めて見物して居る。彼の解釈に従ふと、日本でどうやら藝術の本旨が一番近いものは、此れ等の惨酷な、肉感的な人殺し芝居なのである。(「饑太郎」二卷・四〇三頁)

谷崎の「藝術の本旨」を叶えるため、毒婦と西洋的な「宿命の女」がナオミの人物造型において織り込まれたと考えられる。近代日本の通念に従って良妻賢母を描いては、その

効果は期待できない。ナオミの人物造型には、近代日本への否定的なスタンスが現れている。

そして前節で触れたが、近代社会では自我を持った女性、谷崎の言葉を借りると「自覚ある女」の否定が起こっていた。特に日本においては良妻賢母的女性像が女子に求められる社会通念として存在していたことから、自我を意識し自立する傾向にある「自覚ある女」への強い抵抗があったと考えられる。しかし谷崎の場合はまた違った。「痴人の愛」ナオミの人物描写を通して、当時の近代社会に潜む意識とは逆に「自覚ある女」を肯定することで、近代を否定する姿勢を呈しているのではないだろうか。

本論で取り上げた「痴人の愛」ナオミは「宿命の女」のごく一例である。日本近代文学の「宿命の女」といっても、その女性像は多様であり、本論で行った解釈が他の「宿命の女」全てに当てはまるわけではない。しかし、その女性像に見える日本の伝統的な要素や西洋がもたらしたであろう要素、作家の受容したものや時代背景に注目し検討することで日本近代文学の「宿命の女」像を紐解いていくことができる。考える。

注

- (1) 『肉体と死と悪魔』(倉智恒夫他訳) (昭和六一年一月、国書刊行会)
- (2) 『明治東京の宿命の女』(平成一九年三月『文藝言語研究 文藝篇』所収、筑波大学文藝・言語学系)
- (3) 『世紀末の自然主義―明治四十年代文学考―』(昭和六一年八月、有精堂)
- (4) 『近代日本文学の源流』(平成元年四月、新典社) 一九頁
- (5) 「著者より『ロシア語版『痴人の愛』』(国松夏紀訳)より、初出は大正一三年一月一日発行『女性』一月臨時特別号である。
- (6) 「メリー・ピクフォード」は、カナダ出身のハリウッド女優メアリー・ピクフォード (Mary Pickford: 一八九二―一九七九) のこと。一九〇九年に映画デビュー、美しさとあどけない魅力を持ち味とし、三〇才を過ぎてもお少女役を演じていた。ナオミはメアリー・ピクフォードと外見が似ていることが作中では繰り返し述べられているが、これはナオミの外見に西洋じみた要素とあどけない少女性が両立していたことの証拠になるだろう。(参考: デイヴィッド・クインラン『クインラン版世界映画俳優大辞典』(柴田京子訳) (平成一四年一月、講談社)、『若波IIケンブリッジ 世界人名辞典』(平成九年一月、岩波書店)
- (7) 『谷崎潤一郎論』(昭和二七年一〇月、河出書房)
- (8) 『痴人の愛』試論―主題と方法の背反―』(昭和五五年一月『国語と国文学』所収)
- (9) 「痴美神と「近代」の激闘(痴人の愛)」(昭和五一年一〇月『国文学解釈と鑑賞』所収)
- (10) 『痴人の愛』(谷崎潤一郎) (昭和六二年一〇月『国文学解釈と鑑賞』所収)
- (11) 『谷崎潤一郎論』(昭和四八年八月、中央公論社)
- (12) 「神になった女―『痴人の愛』について―」(昭和五二年七月『海』所収)
- (13) 「混血するナオミの不潔な肌―『痴人の愛』の背理―」(平成二二年三月『大妻国文』所収)
- (14) 「谷崎潤一郎と女性」(平成四年二月『国文学解釈と鑑賞』所収)
- (15) 「『痴人の愛』論―その白人女性の意味を中心に―」(昭和六三年四月『国語と国文学』所収)
- (16) 「彫像になる女たち―谷崎潤一郎(永遠の女性)への歩み―」(平成四年一月『稿本近代文学』所収)
- (17) 『日本近代文学大事典』(昭和五二年一月、講談社)「毒婦物」(浅井清)の項より
- (18) 『日本近代文学大系 第一巻 明治開化期文学集』(昭和四五年十二月、角川書店) 所収
- (19) 初出は明治一〇年二月一〇日から一一年一月一〇日『かなよみ』に連載された「鳥追お松の伝」である。連載途中で中

止の後、物語の続きが加えられた完成版が明治一二年二、三月に『鳥追阿松海上新話』として錦栄堂より刊行された。

(20) 本書は明治一一年六月から一一年一月に金松堂から刊行された。

(21) 本書は明治一二年二、三月に金松堂から刊行された。

(22) 昭和五年八月『国文学 解釈と教材の研究』所収

(23) 銘酒屋とは、酒場に見せかけた売春宿のことである。表面は飲み屋の看板を出すものの、実際には店で待機する女性が売春するという営業形態をとっていた。当時吉原遊郭などの公娼地以外での売春は認められていなかったが、取締がそれほど厳しくなかったため、浅草では明治後期から大正にかけて銘酒屋が急速に増加していった。特に一二階下や千束町一帯には、銘酒屋や新聞縦覧所の名目で数百件の私娼窟が軒を並べていたとされる。当時浅草が東京における最大規模の盛り場であったこと、近くにあった吉原遊郭は遊び代が高価で、庶民にとって敷居の高いものであったことから、銘酒屋が生まれたと考えられている。(参考：前田愛、小木新造編『明治大正図誌 第二巻 東京二』(昭和五三年一〇月、筑摩書房)、日比恒明『玉の色街の社会と暮らし』(平成二二年一〇月、自由国民社)(24) 「明治初期の毒婦物における悪女造型のレトリック その(一)」(平成三年七月『東京経済大学人文自然科学論集』所収)(25) 初出は明治四四年六月『スバル』である。(26) 初出は大正二年一月『中央公論』に原題「悪魔(続篇)」として発表された。

(27) 初出は大正三年九月『中央公論』である。

(28) 初出は明治四三年一月『新思潮』である。

(29) 初出は昭和三年一月『中央公論』である。なお座談会に

ついての引用は小谷野敦、細江光編『谷崎潤一郎対談集——文藝編』(平成二七年三月、中央公論新社)を用いた。五六九頁

(30) 初出は昭和三七年五く六月、昭和三八年二く三月、九月『朝日新聞』3版である。

(31) 「谷崎潤一郎と近世の文化」(昭和五八年五月『国文学解釈と鑑賞』所収)

(32) 初出は昭和三三年一月『婦人公論』である。『対談集』一〇七頁

(33) ナオミのモデルを、千代夫人の妹せい子(芸名：葉山三千子)とする論も多くある。(野口武彦『谷崎潤一郎論』(昭和四八年八月、中央公論社)や秦恒平『谷崎の妻』(昭和五一年一〇月『国文学解釈と鑑賞』所収)など)谷崎とせい子は恋愛関係にあったとされ、彼女が一五歳の時に引き取り同棲していた。ただ、谷崎本人はモデルについて否定している。

(34) 初出は大正五年二月『東京朝日新聞』である。

(35) 高頭麻子「時代遅れの恋——『マノン・レスコー』と『痴人の愛』」(平成七年三月『早稲田フランス語フランス文学論集』所収)と酒井美星『マノン・レスコー』と『痴人の愛』——フランスと日本を代表するファミ・フアタル物語の比較——(平成三二年三月『Lillia candida : フランス語フランス

文学論集』所収) によって二つの比較検討がなされている。高頭氏は、二つに共通する女性崇拜の意識を指摘し、また讓治は西洋、デ・グリユは恋という局面に見える彼らの(本物) コンプレックスを指摘した。

(36) 初出は一八四五(弘化二)年一〇月『Revue des Deux Mondes』(日本語:『両世界評論』)である。本文の引用に際しては、『カルメン』(堀口大學訳(平成二〇年六月、新潮社)を用いた。

(37) 『大辞林』第三版「君子」の項より引用

(38) 初出は大正三年一月『中央公論』である。

(39) 初出は昭和八年六月『中央公論』である。

(40) 初出は昭和三六年一月から昭和三七年五月『中央公論』である。

(41) 「谷崎潤一郎のボードレル受容に関する一考察——谷崎訳『Le Fou et la Venus』をめぐって——」(平成三〇年五月『言語文化共同研究プロジェクト』所収)

(42) 初出は大正五年六月『社会及国家』である。

(43) 初出は昭和六年「婦人公論」四月号から六月号まで、三回にわたって連載されたものである。

(44) 「漱石とコルタサルの作品の女性像について——宿命の女性たちはなぜ殺されたのか——」(平成一八年三月『京都産業大学論集人文科学系列』所収)

(45) 『ヒロインからヒーローへ 女性の自我と表現』(昭和五七

年一二月、田畑書店) 一七頁

(46) 明治四〇年七月一九日小宮豊隆宛書簡より。引用は『定本 漱石全集』第三卷(令和元年九月、岩波書店)を用いた。

(47) 初出は大正五年一月『中央公論』である。

(48) 『良妻賢母という規範』(平成三年一〇月、勁草書房) 五八頁

(49) 初出は大正四年一月『新小説』である。

(50) 柴田勝二「(自然)の牽引——『痴人の愛』『吉野葛』における魅惑の在り処」(平成三二年二月『総合文化研究』所収)

(51) 「佐藤春夫に与へて過去半生を語る書」『全集』一六卷・三三九頁、初出は昭和六年一月、一二月『中央公論』である。

参考文献

伊藤整他編『日本現代文学全集 (一) 明治初期文学集』(昭和四四年一二月、講談社)

岩佐壮四郎『世紀末の自然主義——明治四十年代文学考——』(昭和六年八月、有精堂)

大久保喬樹『近代日本文学の源流』(平成元年四月、新典社)
興津要、前田愛校注『日本近代文学大系 第一卷 明治開化期文学集』(昭和四五年一二月、角川書店)

北原泰邦「毒婦」の身体性——仮名垣魯文『高橋阿伝夜刃譚』の物語構造——(平成一五年一〇月『國學院雑誌』)

須田千里、岩田秀行校注『新日本古典文学大系 明治編 九 明治

戯作集』（平成二二年一月、岩波書店）

田鎖教馬『谷崎潤一郎と芥川龍之介——「表現」の時代——』（平成

二八年三月、翰林書房）

千葉俊二『痴人の愛』（谷崎潤一郎）（昭和六二年一〇月『国文学

解釈と鑑賞』所収）

中村光夫『谷崎潤一郎論』（昭和二七年一〇月、河出書房）

野口武彦『谷崎潤一郎論』（昭和四八年八月、中央公論社）

野口武彦『毒婦物の系譜』（昭和五一年八月『国文学解釈と教材の研究』所収）

平石典子『明治東京の宿命の女』（平成一九年三月『文藝言語研究
文藝篇』所収、筑波大学文藝・言語学系）

前田久徳『痴人の愛』試論——主題と方法の背反——」（昭和五五
年一月『国語と国文学』所収、至文堂）

松本鶴雄『痴美神と「近代」の激闘（痴人の愛）』（昭和五一年一〇
月『国文学解釈と鑑賞』所収、学灯社）

Durham, Valerie L. 「明治初期の毒婦物における悪女造型のレトリ
ック その（一）」（平成二二年一二月『東京経済大学人文自然科学
学論集』所収）

附記 谷崎作品の引用は『谷崎潤一郎全集』（平成二七年五月〜平

成二九年六月、中央公論新社）による。なお、全集から引用の

場合は引用部末尾に巻数と頁数（「痴人の愛」は全て『谷崎全

集』第一一巻からの引用につき、巻数は省略）、その他の文献か
ら引用の場合は頁数を付した。その他、文献の引用に際し適宜
ルビ等を略し異体字は通行字に改めた。また、／は改行を示す
ものである。

（にしむら・なな 令和元年度卒業生）